

日本中國學會報 第六十九集
二〇一七年十月七日 發行 拔刷

五山文學における總集と別集——編成を中心に——

堀川貴司

五山文學における總集と別集——編成を中心に——

二一四

堀川貴司

はじめに

一三世紀後半から一七世紀前半、およそ四百年にわたって、日本漢文學の中心地のひとつとして盛んな活動を行った五山においては、その詩文集を主として寫本によって流布させ、また後代へと傳えてきた。そのなかで主なものは、『五山文學全集』『五山文學新集』の二大叢書、および『續群書類從』『大日本佛教全書』等に翻刻収録されている。このうち、玉村竹二校訂編纂になる『五山文學新集』全六卷別卷二は、可能な限り傳存寫本を調査し、収録作品の異なる寫本についてはそれを總合して全作品を網羅することに努めている。解題には、それぞれの寫本の様態や傳來等が詳記されている。また、『續群書類從』所収作品については『群書解題』によってある程度それに近い情報が得られる。

本稿はこれらを参照しながら、稿者自身の調査も加えて、五山文學において總集および別集はどのような形で編成されているのか、配列や規模、編集目的などに留意しながら概観したい。言及する作品は、特に斷らない限り右記叢書所収のものである。

一、總集（詩集）について

數は少ないながら、五山僧の編纂による總集がある。別集について考える前に、その内容や編成について見ておきたい。

まず、中國作品を集成したものとして、次のようなものがある。

* 義堂周信編『貞和集』¹⁾

初撰本『新撰貞和分類古今尊宿偈頌集』三卷（貞和年間＝一三四五～四七の成立）と再撰本『重刊貞和類聚祖苑聯芳集』一〇卷（義堂没年の嘉慶二年（一三八八）頃の成立）とがある。宋代禪僧（來日僧を含む）の偈頌を分類編集したもので、初撰本は五・七言絶句のみ、再撰本は律詩も含み約三〇〇首。兩本ともに五山版があるが、初撰本の出版は編者が關與していない海賊版だったため、完全版を目指し最晩年まで編纂作業を續けたという。内容別の分類がなされており、それを再撰本で示せば、【卷一】頌古・經教・語錄・禮塔・造塔（舍利附）【卷二】讚【卷三】天文・節序・時事・地理・靈跡・寺觀・居處・田地・接待【卷四】帝王・宰臣（儒士附）・慶賀・道士・父母・伎藝・住院・示衆・退院・辭免【卷五】頭首・侍者・知事・化士・沙彌（童行尼女附）・師弟・

法眷・悟道・道號【卷六】送行・禮禱・行旅・遊覽【卷七】簡寄・酬答・懷友・招友・尋訪・會合・離別・留人・住菴・山居・紀夢【卷八】道具・法器・衣服・器用（樂器附）・文用・食物（藥物附）・茶湯・燈燭（柴炭附）・沐浴【卷九】圖畫・飛走・草木【卷十】法數・疾病・哀悼・雜類である。卷一が公案や經典・語録、先師の墓所の禮拜といった偈頌の中心的題材を集め、卷二も佛祖および先師への贊、卷四・五は禪宗寺院の構成員や人事に關わるもの、卷六・七もそれに準じるもの、卷八は寺院内の日用品や飲食など、といった具合で、禪僧としての修行生活に密着した内容が多くを占める。

*江西龍派編『新選集』（『新選分類集諸家詩卷』二卷）

應永七年（一四〇〇）頃成立。唐宋金元および明初の詩人（禪僧も含む）の七言絶句約一二〇〇首を、天文・節序・地理・寺觀・懷古付題詠・人品・簡寄付贈答・尋訪付會合・送別・行旅付從軍・遊覽・閨情・哀傷・器用・衣服・草木・鳥獸・畫圖・雜賦の全一九部門に分類している。『貞和集』の卷三、卷四・六・七・八の一部、卷九、卷十の一部、すなわち偈頌の色が薄い部分のみを取り出し、『貞和集』にはなかった懷古・從軍・閨情といった中國詩における重要なテーマを増補した分類になっている。収録作品が多い部門は、雜賦・懷古付題詠・畫圖・草木（いずれも一〇〇首以上）である。

*慕哲龍攀編『新編集』（『續新編分類諸家詩集』二卷）

應永一七年（一四一〇）頃成立。『新選集』の補遺として、同様の對象から七言絶句約一三〇〇首を、天文・節序・地理・草木・禽獸・宮省・居室・懷古付題詠・儒學・仙道・釋教・武用付從軍・雜職・人事・簡寄付贈答・訪尋付會合・送別・行旅・遊覽・閨情・哀傷・畫圖・器用・衣服・雜賦の全二五部門に分類している。『新選集』よりも細分

化されているが、獨自部門の所收作品はそれほど多くなく、中心となるのは『新選集』と同様の四部門である。

この『新選集』『新編集』は、『貞和集』完成後約一〇年・二〇年というそれほど間隔のない時期の編纂であるにもかかわらず、偈頌を排除し、俗人の作品を中心に編纂され、テーマも禪宗寺院獨特のものはほとんど見られなくなっている。

兩本が増補改編（兩本を採合したもの、韻別に再編したものなど）されながら流布し、その縮約本『錦繡段』（正續）も廣く行われたことを考えると、このような内容が一五世紀以降の五山禪林の詩風を方向付けるものであった（あるいはそのような方向性を見据えて編集された）、と言えよう。

*春溪洪曹編『錦囊風月』一〇卷³

永享一一年（一四三九）自序。唯一の傳本國立國會圖書館藏本によれば、七言絶句二三六〇首を全二九部門、【卷一】天文・節序・時候【卷二】地理・宮室【卷三】王臣・百官（付文武）・親屬・釋道・禁御・隱逸・漁獵・樵牧・農耕【卷四】婦女・遊宴・音樂・伎藝【卷五】衣服・飲食・器用【卷六】圖畫【卷七】人事【卷八】羽族・毛族・鱗介・昆蟲【卷九】百花【卷十】草木、と分類する。人物の職業を細分し、鳥獸（あるいは禽獸）も四つに分けているが、それを統合してしまえば、『新選集』『新編集』と大差はない。所收作品が多いのは百花・圖畫・宮室・人事で、宮室には、歴史の舞臺となった建物を詠む詩が多いので、『新選集』『新編集』における懷古付題詠に相當し、人事も、内容的には兩本の雜賦に近い。すなわち、全體的な収録の傾向はほぼ近似している。

*天隱龍澤編『錦繡段』

康正二年（一四五六）自跋。『新選集』『新編集』兩本が大部で暗誦

に適さないため、抜粋して三三八首としたもの（後人の増補による三三一首のものも流布する）。分類は、天文・地理・節序・懷古付題詠・簡寄付贈答・尋訪付會合・送別・行旅・遊覽・閨情・哀傷・器用・食服・草木・鳥獸・畫圖・雜賦の一七部門で、ほぼ『新選集』を踏襲し、省いた二部門や『新編集』独自の部門の作品は適宜類似の部門に収録している。

* 月舟壽桂・繼天壽哉編『續錦繡段』

大永元年（一五二二）自跋。やはりほとんどは『新選集』『新編集』兩本より、『錦繡段』未収録のものを三〇一首選ぶ。分類は、天文・地理・節序・懷古・人品・簡寄・草木・禽獸・遊覽・送別・尋訪・行旅・閨情・哀傷・器用・食服・圖畫・雜賦の一八部門で、草木・禽獸の部門名と位置は『新編集』に倣い、陸游・白居易を多く収め、さらに『新選集』『新編集』原撰本にない作品も數首収録するなど、『錦繡段』正編と異なる獨自性がある。

これら正續『錦繡段』には注釋書（抄物）が作られ、近世以降は本文・抄物とも版本になって流布した。

次に、五山の作品を収めた總集として、次のようなものがある。なお、雑多な集成は多く存在したであろうが、書名や編集意圖が明確なものに限ると、知られているのはこれら六種となろう。

* 『花上集』

長享三年（延徳元年Ⅱ一四八九）彦龍周興序。編者不明。義堂周信、絶海中津以下二〇名の漢詩各一〇首、合計二〇〇首（すべて七言絶句）を収める。

書名は「花」字の「上」、つまり草冠を「十」と書くことから、収録した作者の數二〇を示したものである。本書には一六世紀前半に

成立したと見られる注釋書『花上集鈔』がある。

* 横川景三編『百人一首』

収録作品成立の下限である文明一二年（二四八〇）以降、編者が没した明應二年（二四九三）以前の成立。絶海・義堂以下一〇〇名の漢詩各一首、合計一〇〇首（すべて七言絶句）を収める。

* 『北斗集』

明應七年（二四九八）天隱龍澤序。編者不明。月翁周鏡以下七名の漢詩各二〇首、合計一四〇首（すべて七言絶句）を収める。作者は『花上集』とは重複せず、その後繼者たちを選んでいる。續編という意識がある。

書名は北斗七星に由来する。これも『花上集』同様収録した作者の數を示しつつ、「泰山北斗」の意も含ませている。

* 如月壽印編注『中華若木詩抄』

成立年不明（一五三〇〜四〇頃か）。中國詩と五山詩それぞれ一三〇首、合計二六〇首（すべて七言絶句）を収める。作者ごとの収録數や配列は不定、ただし中國詩・五山詩が一首ずつ交互に並んでいる。すべてにカナ交じり文・口語體による注釋が付されている。

* 守貞性愚編注『覆篋集』

天文一一年（一五四二）自序。慶應義塾大學附屬研究所斯道文庫藏本のみ知られ、五山詩五〇首（序文による。現存本には四六首収録。すべて七言絶句）を収める。作者ごとの収録數や配列は不定。數首を除き、漢文による注釋が付されている。

* 『翰林五鳳集』

元和九年（一六三三）以心崇傳序・剛外令柔跋。後水尾天皇の命による編纂で、序跋者を含む複數の五山僧および漢學に通じた公家が編

者か。全六四卷、約一五〇〇〇首を収める大部のもので、主に七言絶句だが、他の詩體も混じる。内容別に二七部門に分類されている。収録作品は一四世紀から一七世紀初頭にわたるが、一五世紀末以降の作品が大部分を占める。分類は以下の通り。

【卷一〜九】春【卷一〇〜一二】試筆【卷一三〜一六】夏【卷一七〜二〇】秋【卷二一〜二三】冬【卷二四・二五】招寄【卷二六〜三一】和韻【卷三二・三三】送行【卷三四】悼・和・哀傷【卷三五〜三七】雜乾坤【卷三八】雜人倫【卷三九】雜氣形【卷四〇・四一】雜生殖【卷四二〜四四】食器【卷四五〜四八】畫圖【卷四九〜五一】扇面【卷五二】八景【卷五三・五四】本朝名區【卷五五】本朝人名【卷五六】道號【卷五七】釋教【卷五八〜六一】支那人名【卷六二・六三】戀【卷六四】錯雜・旅泊・感懷・祝讚

これまでの分類が中國の類書等に見られる天地人の傳統的配列を意識していたのに對し、本書は時節(四季)から始まる日本の和歌集『古今和歌集』を規範とする敕撰集、それに倣った私撰集、私家集等に倣う。ただし和歌集ならば同等の比重で戀・雜と續くところ、卷二四以降はこれまでの總集に似た部門を立てる。春から「試筆」(年頭における詩の作り初めおよびその贈答)、畫圖から「扇面」「八景」が獨立しているのは、それだけ作品が多くあったためであろう。さらに「本朝名區」「本朝人名」という、日本独自の題材に三卷を割いているのも、特に室町後期、土着的な題材が五山詩に取り込まれてきたことの反映である。偈頌は卷五六・五七の二卷のみであるが、部門をあえて立てている點は、後述する別集の編成とも關わって注目される。

中國詩の總集がすべて分類編集であるのは、五山における詩作の參

考にするためであろう。五山では各寺院・塔頭において定期的な詩會が開かれ、出された詩題を競作することによって、それを如何に詠むべきかの修練を行った。その時々々の詩題に應じて、參考にすべき作品を検索するには、題材別に分類されている詩集が便利である。詩會以外でも、五山僧の作詩機會をほぼ網羅するように、題畫詩や贈答詩などの部門も設置されているので、重寶したことであろう。分類には、中國の類書(『新編事文類聚』他)や分類體總集『唐宋時賢千家詩選』といったものが參考にされたであろう。

それに對して、五山詩の總集のうち『花上集』『百人一首』『北斗集』は作者別に編成され、作者の配列はほぼ時代順になっている。すなわち、義堂・絶海を出發點とする五山禪林の模範となる詩の歴史を示しているのである。

『覆篋集』は初心者向けに作られ、當時知られていた有名な詩を覚えさせるという意圖で、特に配列に意を用いた形跡はない。『中華若木詩抄』は、中國詩の小規模な總集と五山詩總集とが合體し、詳しい注解を伴って、初心者への手引き書として萬全の内容になっているものであるが、配列に關しては、日中の作品を交互に並べること以外は特に意圖がないようである。ただし、採録詩の選擇には『覆篋集』同様の意圖がある。二書ともに『花上集』『百人一首』と重なる作品も多い。

『翰林五鳳集』は、室町幕府に代わって朝廷が五山の庇護者となる、という政治的意圖が、奉敕撰により室町時代の五山文學を集大成する、という形で表現されたものだと言えるが、一方で題材別の編集には、作詩の參考にもなるように、という實用面も考慮されているであろう。韻別に再編した寫本の存在がそれを傍證する。⁶⁾

二、別集について(一)

偈頌と詩という視点からの概観

五山僧の別集が通常の詩人文人の別集と異なる点の一つが、前章の『貞和集』とそれ以降の總集の違いにも見える、偈頌の存在である。

そもそも五山文學の始發と目される、一三世紀後半の來日僧の別集は、いわゆる語録である。例えば一山一寧(二四七―一三二七、一九九來日)の『一山國師妙慈弘濟大師語録』(大正新脩大藏經八〇)は、上卷に、住持を務めた中國・日本の寺院における語録および小參・法語・拈古・頌古、下卷に偈頌・佛祖贊・自贊・小佛事を収める。上卷は禪僧(特に住持)としての説法や、公案について詠んだ偈頌で、語録の中心となるべきものである。下卷はやや幅廣く、弟子に授けた道號の謂われを説く道號頌、旅立ちを送る送行頌、佛祖や自分自身の畫像(頂相)への贊などが收められているが、いずれも自己の禪的境地をモノやコトに託して表現するとともに、弟子を悟りへと導いたり、俗人を禪の世界へと誘うような、教化の姿勢に基づく製作であり、これらも偈頌に他ならない。一山には瀟湘八景圖への畫贊詩も残っているが、それはこの語録には収録されておらず、本人あるいは門生にとつて残すべき作品と認識されなかつたのであろう。

やや時代が下ると、竺仙梵僊(二九二―一三四八、一三二九來日)のような例も出てくる。すなわち、竺仙には法語・偈頌・贊語等を収める『竺仙和尚語録』(大正新脩大藏經八〇)以外に、『來々禪子集』(在元時)『來々禪子東渡語』『來々禪子東渡集』『來々禪子尚時集』(三書とも來日後)という偈頌集と、『天柱集』(鎌倉淨智寺在住時)という偈頌・文章の集があるのである。ここには、通常の偈頌以外に花鳥畫への畫贊

なども含んでいる。竺仙には『宗門千字文』という、禪の教えを千字文に做つて四言の韻文にまとめた著作もあり、門弟や世俗への教化の姿勢が強い。また、もともと偈頌を修行の中心に置く金剛幢下(古林清茂門下)の一員である。偈頌が語録内部に収まりきれず、獨立した集としてまとめられた原因はそんなところにあるだろう。

日本人僧だと、鐵庵道生(二六二―一三三二)に『鈍鐵集』、天岸慧廣(二七三―一三三五、一三二〇―二九八元)に『東歸集』がある。いずれも語録とは獨立した偈頌・詩文集である。鐵庵は一山らに、天岸は古林らに學んでいる。

北宋では覺範慧洪の『石門文字禪』のような突出した存在はあるものの、まだ一般的ではなかつた詩文集が、南宋末や元の禪僧では語録とは別に「〇〇外集」などと稱する詩文集を持つ僧が増えてきたことと軌を一にする現象であらう。

南北朝時代に入ると、虎關師鍊(二七八―一三四六)には『十禪支録』『續十禪支録』という語録とは別に『濟北集』二〇卷がある。卷一―四が賦・古詩・律詩・絕句、卷五・六が偈贊、卷七―九が原・記・銘・序跋・辨議書、卷十が外紀・行記・傳・表・疏、卷十一が詩話、卷十二―十五が清言・祭文・論、卷十六―二十が通衡、という編成で、韻文六卷、散文一四卷から成る。韻文は、六卷のうち四卷が詩、二卷が偈頌、散文においては卷七から十一までの五卷がほぼ世俗的な内容であり、そもそもこのようにさまざまな詩體・文體を駆使するということと自體、初期五山の禪僧のあり方からは相當に逸脱していると言える。

中巖圓月(一三〇〇―一七五、一三三五―一三二八元)は主著『東海一瀛集』(『五山文學新集』四所收本文による)の編成を、卷一に賦・詩、卷二に記・

表書・雜著、卷三に中正子(儒學思想を述べたもの)、卷四に隨筆(藤陰瑣細集・文明軒雜談)、卷五に語錄、さらに別集に眞贊・拈香・秉炬・佛事・疏・銘・行狀・序など、とした。ここでは語錄・偈頌と世俗的な詩文との比重が逆轉し、特に偈頌が本集に對する「別集」いわば附録扱いになっているところが注目される。

『花上集』や『百人一首』において五山文學の始發として仰ぎ見られた義堂周信(一三二五—一八八)は、語錄の他に『空華集』不分卷(五山版)があり、文を一一の文體、詩を七言八句・七言絶句・五言八句・五言絶句・六言・四言・古詩の七詩體に分けて配列する。なお、『五山文學全集』が底本とするのは、元祿九年(二六九六)に當時の禪僧が増補再編し刊行した二〇卷本で、こちらは詩一〇卷、文一〇卷と等分、それぞれ詩體・文體別に整然と編集されている。こちらも詩のみ挙げると、卷一に古詩・歌・楚辭・四言絶句・五言絶句・六言絶句・七言絶句、卷二〜五に七言絶句、卷六に五言律詩・五言排律、卷七〜九に七言律詩、卷十に七言律詩・七言排律となっている。偈頌は全體に溶け込まされている。なお、日記『空華日用工夫略集』にも贈答詩などが収められている。

絶海中津(一三三四—一四〇五、一三六八—七六カ留學)は語錄三卷の他は、『蕉堅稿』一卷(五山版あり。付訓覆刻された寛文一〇年(一六七〇)刊本は二卷二册)が傳わるのみで、五言律詩・七言律詩・五言絶句・七言絶句・疏・序・書・說・銘・祭文の順に配列される。偈頌は語録巻下に収められ、拈古・道號頌など以外にも、禪僧との贈答も含まれていて、内容によってどちらに収めるか判断された可能性がある。なお文章に關しては、『善隣國寶記』所收の外交文書など、本書未收のものがある。

このように、『貞和集』を編纂した義堂も、創作においては世俗的な内容のものがかなりの比重を占めるようになっており、この傾向が絶海を経て次代の室町前期にも繼承されて、例えば惟忠通恕(一三四九—一四二九)・惟肖得巖(一三六〇—一四三七)・江西龍派(一三七五—一四四六)らも、語錄以外の集が中心となる。しかし一方で、南北朝期の五山僧が、中國文人ばりに幅廣い詩體・文體の著作を残したのとは異なり、四六文(疏と呼ばれる公式文書)と詩(特に七言絶句)に集中するようになり、偈頌も次第に少なくなっていくのである。

さらに次世代の瑞溪周鳳(一三九二—一四七三)・希世靈彦(一四〇三—一八八)・横川景三(一四二九—一九三三)・天隱龍澤(一四二二—一五〇〇)・萬里集九(一四二八—一五〇三頃)らになると、偈頌あるいは語錄を別立てにしないものも増えてくる。また、詩體は七言絶句が壓倒的に多くを占めるようになる。

もつとも、希世・萬里のように五山寺院の住持に就任していない僧の場合、語錄を編集するに足るほどの法語類を残す機会がなかったとも言えるので、個別の事情を見ていく必要はあるが、全體としてこのような傾向は室町末まで續くようである。そのなかで、景徐周麟(一四四〇—一五一八)『翰林葫蘆集』は、詩文を分け、文は文體別にするなど、編集が行き届いているが、詩體は分けず、ほぼ編年體である。偈頌と詩では壓倒的に詩が多い。

さらに室町末の例を挙げると、英甫永雄(一五四七—一六〇二)『倒痴集』は不分卷、次のような編成になっている。一部に五言絶句等が混じるが、ほとんどが七言絶句である。一部に亂れが有るものの、ほぼ編年體による。

(章題なし) 六七九首

故事 三二首

贊 一九首

追悼 八五首

送行 二二首

招詩 一首

頌 一首 (全九四八首)

頌に收められているのは、建仁寺住持就任を勧める詩への返事、東寺に宿泊して大師忌の儀式を見て詠んだもの、「佛涅槃日」「般若湯」「木犀花數珠」「拄杖化龍」といった禪寺ゆかりの事物、「智門蓮華話」「庭前柏樹」といった公案を題にしたものなど、題材が明確に禪的なものに限定されるが、贊・追悼・送行などにもある程度禪的な内容が含まれるだろう。また語録『羽弓集』に重複して收められている作品もある。従つて、贊以下約二三〇首は、ある程度偈頌に近いものと言つてもよいだろう。これは、室町前中期の五山で活躍した僧に比べると多いとも言える。南北朝以降、文人的な傾向を強めていた五山僧が、將軍を中心とした體制の崩壊とともに、地方大名や町人との関わりの中で、やや禪僧としての教化的な方向へ動いていったことの現れかもしれない。

前章で見た總集における偈頌から詩へ、という傾向は、別集においてもほぼ並行して(あるいはやや早く)進んだ。編成については、南北朝期ものが詩體別編集を行つていたのに對し、そもそも詩體が七言絶句に集中するようになるため、その意味を失い、編年體が主流となつていく。

三、別集について (二) 横川景三の例

横川景三(一四二九—一九三)は相國寺において活躍した、一五世紀後半を代表する五山僧のひとつで、學問の師は瑞溪周鳳(一三九一—一四七三)、友人に『史記』『周易』等の注釋で知られる桃源瑞仙(一四三〇—一八九)がいる。

彼の作品は、『五山文學新集』第一卷に翻刻されている。ここでは、その内譯を、○……自筆稿本を用いたもの、●……その後自筆稿本系統本が出現したもの、を付して一覽表にした。

小補集(補庵絶句上)

享徳三年(五四)〜寛正五年(六四) 瑞溪序

補庵集(補庵絶句下)

寛正五年(六四)〜應仁元年(六七)

【應仁元年八月、戰亂を避けて近江に疎開】

●小補東遊集

應仁元年(六七)〜二年(六八) 瑞溪跋

(付・小補西歸集 應仁二年四月〜七月の上洛期間のみ)

五山文學新集所收本文(滋賀縣永源寺所藏本)および他傳本と比較すると、自筆稿本系統本には「江東避亂聯句」と朝倉尙氏が假稱した三〇卷の聯句すべてが收められている點で大きく異なり、自筆稿本の忠實な轉寫本であると推測される。ただし、末尾「西歸集」は五山文學新集所收本文と同様、詩體別に分類されている。

小補東遊後集

文明元年(六九)

瑞溪序

○小補東遊續集

文明二年(七〇)～四年(七二) 瑞溪跋、希世靈彦批點

【文明四年春歸京】

○補庵京華(前)集

文明四年(七二)～八年(七六) 希世命名、益之宗箴句讀

○補庵京華後集

文明九年(七七)～十二年(八〇) 蘭坡景藍句讀

【文明十二年七月相國寺第七九世住持となる(名目のみ)】

○補庵京華續集

文明十二年(八〇)～十四年(八二) 桃源瑞仙句讀

○補庵京華別集

文明十五年(八三)～十七年(八五)

【文明一七年四月相國寺再住、入寺式を行う】

○補庵京華新集

文明一七年(八五)～長享元年(八七)

【長享元年一二月南禪寺住持(名目のみ)、二年四月相國寺三住】

○補庵京華外集上

長享二年(八八)～延徳二年(九〇)

○補庵京華外集下

延徳二年(九〇)～明應元年(九二)

蒼菴集

入寺疏と啓割(儀禮的な書簡)から成る。

入寺疏末尾に寛正三年瑞溪跋あり。啓割は朝倉氏により、別人の

作と考證された¹⁾。

また朝倉氏は、『翰林五鳳集』卷六三所收「春萼宛艶詩」作品群(少年僧宛での戀愛詩)を、文明五年から九年にかけての横川の作と指摘¹⁰⁾、

これらは當該年時の作品を収める『補庵京華(前後)集』には入っていない。このような艶詩を除けば、詩・偈頌・文章(散文・四六文)、場合によつては聯句に至るまで收め、編年體によつて編集している。

このように横川は、三年程度を劃期として集をまとめ命名、師友に序跋や批點・句讀を求めている。その區切りとなるのは、應仁の亂を避けるための近江避難(東遊)、そこからの歸還、住持就任など、人生上の節目となる出來事が主である。

玉村竹二氏は、前後續別新外遺と續けていく類似の書名として『新編事文類聚』等の中國の類書・雜書を擧げているが、同じ詩文集ということでは、例えば宋・楊萬里の『誠齋集』のうち詩の部分(『江湖集』『荆溪集』『西歸集』『南海集』『朝天集』『江西道院集』『朝天續集』『江東集』『退休集』)、明・宋濂の別集(『潛溪前(後)續・別・新集』『蘿山吟稿』『宋學士文粹(正續)』『鑾坡前(後)集』『翰苑續(別)集』『芝園前(後)續)集』『朝京稿』)などの編集方法を先例としたものとも想像される。

なお、玉村氏も指摘する、後人の手になる文體別改編本の存在は、後述の小規模詩集とも關連して、横川作品が作詩の參考として享受されていたことを裏付けるものであろう。

四、別集について(三) 琴叔景趣の例

琴叔景趣(慶趣とも書く、一四三二―一五〇七)は南禪寺を中心に活躍した五山僧である。應仁の亂を避けて近江に避難しているとき、友人の梅陽景卓とともに、全百題の七言絶句を詠じた『梅陽琴叔百絶』を作る。明應七年(一四九八)には南禪寺住持となる¹¹⁾。

別集『松蔭吟藁』には國立公文書館内閣文庫本と續群書類従本の二寫本が知られるが、収録作品に大きな違いがある。作品にそれぞれ通

し番號を付し、比較のため一覽表を作成した。なお、續群書類從活字本は批點が省略されているので、原本(宮内廳書陵部藏)を用いた。

内閣本 續群本 備考

(八七四首) (六四九首)

序1 ナシ 文明一四年(二四八二)希世靈彦↓〔ウ〕

序2 ナシ 文明四年(二四七二)希世Ⅱ〔オ〕跋

序3 ナシ 文明一六年(二四八四)蘭坡↓〔オ〕

序4 ナシ 文明一五年(二四八三)横川↓〔ウ〕

序5 ナシ 明應九年(二五〇〇)祖溪德澄↓〔ウ〕

現在の寫本では冒頭にまとめられている五篇の序は、内容から考えて、〔ウ〕についてのものと〔オ〕についてのものに分かれる。(序

1については後述)

〔ア〕 1 ↓ 21 七言絶句

〔イ〕 22 ↓ 97 『梅陽琴叔百絶』のうち七十六首

〔ウ〕 98 ↓ 163 七言絶句〔希世批點詩卷〕。批點あり。

〔エ〕 164 ↓ 566 七言絶句、ほぼ編年體、兩本間異同あり。

おおよそ、延徳元年(二四八九)から永正四年(二五〇七)まで順序

よく並び、末尾に文明年間の早い時期のものが付加されているか。

〔オ〕 梅陽序 ナシ 『梅陽琴叔百絶』序

567 ↓ 766 ナシ 同本文。批點あり。

〔カ〕 希世跋 ナシ 同跋(序2に同じ)

767 ↓ 820 593 ↓ 646 偈頌

〔キ〕 821 ↓ 832 ナシ 七言絶句(最晩年のものか)

〔ク〕 868 ↓ 833 ナシ 七言律詩

867 ↓ 820 ナシ 五言律詩

(869 ↓ 874 ナシ 五言絶句

〔ケ〕 ナシ 647 ↓ 649 他人の作を末尾に付加したものを

これをまとめると、内閣本は、次の三種の詩集を合體したものである。

A 『梅陽琴叔百絶』序2・序3・〔オ〕 文明四年成立

B 『希世批點詩卷』序1・序4・序5・〔ウ〕 文明一四年頃成立

C 本來の『松陰吟藁』〔ア〕〔イ〕〔エ〕〔カ〕〔キ〕〔ク〕

Cは、編年體七言絶句詩集〔エ〕を中心とし、初期の『梅陽琴叔百絶』の抜粹〔イ〕を付加〔ア〕は性格不明、偈頌および他の詩體を取り出して後置〔カ〕〔ク〕、最晩年の作〔キ〕を補遺とした。ただし〔イ〕〔キ〕等、どこまで作者自身の編になるかは不明。

それに對し、續群書類從本はB・Cのみの合體であるが、Bの序跋とCの七言絶句以外の詩體を省略している。また、〔キ〕もないのは、〔キ〕成立以前の形の本に基づいたからか。

Cには、七言絶句に特化した編年體詩集を中心とし、その他を末尾にまとめるといふ編集方針が窺える。先述した英甫の詩集の編成にも通うものがある。

このように、性格の異なる複数の詩集を合寫する際、書寫者がそれなりの合理性を以て改編してしまつた結果、原型がわかりにくくなる、といったことが寫本での流布の過程には起こりやすい。個別の字句の誤寫や作品の刪補以外にも注意すべきところであろう。

なお、横川景三と並んで大部の詩文集を残す萬里集九も、現存する傳本は、編年體の詩文混在状態から詩と文を分け、詩は偈頌を抜き出

し、絶句以外を別にまとめる、という形で、琴叔のCに近い形を目指している。

五、別集について(四) 小規模詩集の例

横川の『小補集』、琴叔の『梅陽琴叔百絶』『希世批點詩卷』は、七言絶句のみの小規模な詩集で、師匠・先輩に當たる五山僧の序跋や批點を得ていることが共通する。

『松蔭吟藁』序一(『村庵藁』下(五山文學新集二)にも「書琴叔詩卷后」として収める)には次のようにある。

近來時世有詩人之名、甚夥矣。然而得古作者之風者、未之有也。每益有識之歎而已矣。而今 琴叔自携詩卷來徵豫評點。凡一百有餘篇、句々清新、口之而不置、章々俊逸、手之而不釋。是謂在今世而存古風者。時有願況、必曰「老夫前言戲之爾」。然琴叔所徵不已、故僭評者若干篇、卷而還之。文明壬寅臘月立春村菴靈彦八十歲漫書

この序は、琴叔が自作の詩一〇〇首あまりを持って希世を訪れ、評點を乞うたのに對し、その要求に應じたことを記す。その「詩卷」の跋文として書かれたものである。

文中、「時有願況……」は、白居易が上京して願況に會ったとき、願況は、長安に「居」するのは「大いに易からず」とその名に引つけて冗談を言ったが、その詩卷を讀んで「有句如此、居天下亦不難、老夫前言戲之爾」と前言を撤回したという故事(『唐才子傳』卷六・白居易)を指す。

九淵龍蹊(一三九八?—一四七四)の詩集『九淵詩稿』は、寛正元年(二四六〇)に、上京してきた美濃の禪僧に對して與えた自注付きの小

規模詩集(全四八首)である。本來の別集『葵齋集』があつたはず、「本朝禪林撰述書目」等に載る。だが、現存するのはこの詩集のみである。

その冒頭の詩「長樂宮」の自注には、學問の師である江西龍派が主宰する詩會でこの題を出されて詠み、江西から「公長樂宮詩、佳作也。他年有行卷、以行于世、必以此詩置之於第一番也」と言われた、とある。この「詩稿」の場合、後輩に對して模範を示すという意圖で編集されたのであろうが、もし江西の助言どおりに若い頃に「行卷」を作つていたとしたら、卷頭に置かれていただろう、というのである。

つまり、自信作を厳選した小規模詩集を作り、師や先輩からの批評をもらつてそれを流布させ、實力を廣くアピールすることで、五山における評價を高めるといふ慣習が五山内で行われており、彼らはこのような詩集を、唐宋代に科擧の事前運動として作られた「行卷」に擬していた。

琴叔の場合、文明末々明應にかけて五山内での文學的活動が評價され、蘭坡の推薦で出世し、最終的に南禪寺住持の座を得ているように、實効性があつたものと思われる。

同様の例は、江西龍派が惟肖得巖に「鄙作一百首」を提示して添削を求めたものがある。『五山文學新集』二所收『東海瑤華集(絶句)』の一部として收められているが、『同』別卷一所收『續翠詩集』の冒頭部分にその詩が包含され、卷末に應永二七年(二四二〇)惟肖跋が付されている。

天隱龍澤『翠竹眞如集』(『同』五所收)二の「蒙庵百首(明應八(一四九九)季秋)」は、同門の春莊宗椿の百首詩に批點を施したときの文章(序跋か)で、かつて若かりし時、自分も南江宗沅に百首詩を添削してもらつたことを回想している。

月舟壽桂『幻雲詩藁』（建仁寺兩足院藏〔室町後期〕寫）は、末尾に「右幻雲詩集之内拔厥萃者一百五十篇也、大昌和尚（天隱龍澤のこと）引用者注」之批點廿首其内圈者三首也」とあり、同じ建仁寺の先達に批評を仰いだことが知られる。

天理圖書館藏『日課一百首』（室町末近世初）寫）は、永祿八年（一五六五）、鐵山宗鈍と思われる僧が四月一日から七月二五日にかけて異なる題の詩を一日一首または同題で二首、合計百題一五二首詠み、策彦周良と春澤永恩に批點を加えてもらったものである。

このように、ちょうど一〇〇首、あるいはその前後の分量で、七言絶句中心の詩集を自編したもの、というのが、先述したような「行巻」の内容としてふさわしいと考えられていたようである。

一方、小規模詩集のなかには、『錦繡段』等と同様、内容別に分類編成されたものがいくつか傳存する。

例えば、希世靈彦（二四〇三〜三八）の『村菴稿』（奈良・古梅園文庫藏本、〔江戸前期〕寫）である。希世は、五山の住持にはならなかつたものの、本書の序を記す江西龍派・岐陽方秀・惟肖得巖ら、室町前期を代表する學僧に師事し、その學問を傳えたほか、五山詩のアンソロジーである『花上集』『中華若木詩抄』にその詩が收められているなど、應仁の亂前後の代表的詩僧のひとりであつた。

彼の詩文集は内容を異にするいくつかの寫本で傳わつており、『五山文學新集』二に、最も多數の作品を收める國立公文書館内閣文庫藏林羅山舊藏書を底本に翻刻され、他本による補遺も付されている。同書解題には本書を除く現存諸本の概略があり、それらと比較すると、本書は小規模であること、（部門名は明示されていないが）内容別に分類されていること、この二點に特徴がある。いま假に、『錦繡段』『新選

集』『新編集』の部門名を用いて本書所收作品全二七五首を分類してみると、次のようにならう。

- 1〜20 天文
- 21〜67 節序
- 68〜76 地理
- 77〜81 寺觀（居室）
- 82
- 93 懷古
- 94〜109 器用
- 110〜111 食服
- 112〜134 鳥獸
- 135〜181 草木
- 182〜238 畫圖
- 239〜242 人品
- 243〜267 尋訪・會合・送別
- 258・259 哀傷
- 260〜265 簡寄
- 268〜275 雜賦

諸本のうち本書以外では唯一、建仁寺兩足院藏『希世藁』（室町末近世初）寫、兩足院主利峰東鏡筆、前掲『五山文學新集』所收の前半部分が同様に内容別分類の編集を施された傳本で、こちらは部門名が明示されている。

- 天文・地理・居室・節序・簡寄付贈答送別・懷古・器用・食服・花木・禽獸・畫圖・雜賦

所收作品數や配列からして、それぞれ獨自に編集されたものと思われるが、部門名は『錦繡段』とその前後の總集と共通している。

本書のような例には、他に惟肖得巖『東海瑤華集』瀧田英二氏藏本（『五山文學新集』二所收。現稿者架藏、〔室町末近世初〕寫。これと同内容と思われる神田香巖舊藏〔江戸前期〕寫本が近年慶應義塾大學附屬研究所斯道文庫に收藏された）がある。五言律詩五〇首、七言律詩一九九首を收め、次のようにそれぞれ分類している。

- 五律……地理付居室・節序・簡寄・酬答・惠貺・送別・遊覽・題詠・傷悼・器用・草木・畫圖
- 七律……天文・地理付居室・簡寄・酬答・惠貺・尋訪・送別・遊覽・題詠・傷悼・草木・畫圖

ほぼ『錦繡段』前後の總集の分類と近いが、物の贈答に關わる「惠貺」は獨自の分類であろう（「題詠」はほぼ題畫詩のことで、詩畫軸も含まれる）。

七言絶句以外の詩體をこれだけ豊富に収めているのは、編纂が七言絶句全盛となる以前、室町前期あたりであったことを窺わせる。

心田清播(二三七五—一四四七)『聽雨外集』(『同』別卷一所收、東京大學史料編纂所藏古寫本)は、七言絶句二七八首の詩集で、部門名は記されていないものの、天文・節序・贈答・居室・懷古・送別・招友・簡寄・器用・草木・鳥獸・畫圖・哀傷・雜賦といった具合に分類されている。

江西龍派『續翠詩藁』(『同』別卷一所收、建仁寺兩足院藏〔室町末期〕寫)は七言絶句五〇九首の詩集で、次のように分類されている。

天文・節序・(唱和)・地理・居室・懷古・簡寄付贈答并送別・器用・食服・花木・禽獸・畫圖

このような編纂形態がいつ頃始まったかは不明であるが、(惟肖のものを除き)恐らくは室町中後期以降、五山における詩作が、先行する五山詩を模範として學ぶようになったことと關係するだろう。部門別編纂は、與えられた題の先行作品をすばやく檢索できる便宜を考へてのものであり、それが中國詩總集から、五山詩、しかも別集にまで及んだと考えられるのである。したがって、このような形態の傳本を有する詩集の作者は、五山文學史において大きな影響力を持ったと主要作家と認定できよう。

また、集大成たる『翰林五鳳集』の編纂時、先行する大規模な總集が存在しない五山詩において、多くの編纂材料は別集であったと考えられ、その材料として部門別編纂を施されたものは扱ひやすかつたであろう。あるいは、編纂のために通常の編年體から部門別に再編したのもあつたかもしれない。兩者の關係については、今後の比較檢討が課題である。⁽¹⁸⁾

おわりに

ここまで見てきたような總集・別集のあり方は、當然ながら中國のそれを規範としているところであろうが、『翰林五鳳集』の編成で觸れたように、同時代の和歌のそれとの關係にも注意すべきところがある。

平安後期以降、私家集(個人歌集)は敕撰集入集のために編纂されることが多く、自然と敕撰集の部立(四季・戀・雜の部門のこと)に倣つた編成を取つていた。しかし、同時期から、異なる百の題を詠ませる組題百首が廣く行われ、特に敕撰集編纂直前には編纂下命者が「應制百首」と呼ばれる編纂資料とすべき百首を作らせるといふ習慣も定着してきた。これも關係するの、南北朝時代以降になると、以前よりは私家集の編纂があまり行われなくなり、殘存するものも、日々詠草、つまり未編纂の草稿的性格のものが多く見られるようになる。

その典型は横川景三と同時代の三條西實隆『再昌』(再昌草)で、和歌のみならず、連歌・狂歌・漢詩等も含んだものである。また、地方歌人が小規模歌集を中央の専門歌人に提出して批評を仰ぐといったことも行われている(『私家集大成』七、明治書院、一九七七年、參照)。五山文學を廣く日本文學の中で見たときに氣付かされる、このような同時代性にも留意すべきであろう。

驅け足での概觀のため、見落としもあると思われる。更に個別の詩文集の成立や性格、未翻刻資料にも注意して、全體像をより確かなものにしていきたい。

注

- (1) 編纂の経緯については、朝倉尙「五山版『新撰貞和分類古今尊宿偈頌集』重刊貞和類聚祖苑聯芳集」の刊行をめぐって―義堂周信の存在証明―(『國語國文』第七四卷第六號、二〇〇五年)に詳しい。
- (2) 『新選集』『新編集』『正續』『錦繡段』については、『新選集』『新編集』研究」を副題とする六本の論文を『斯道文庫論集』第四五輯(二〇一一年)第五〇輯(二〇一六年)に連載し、建仁寺兩足院藏『新選集』、慶應義塾圖書館藏『新編集』の翻刻、その他の傳本からの作品補遺、改編本を含めた諸本解題、『錦繡段』(正續)との關係などについて述べた。
- (3) 堀川貴司『錦囊風月』解題と翻刻(『國立歴史民俗博物館研究報告』第一九八集、二〇一五年)に國立國會圖書館藏本の解題・翻刻を収める。
- (4) 以下の六種の總集については、堀川貴司「日本中世禪僧による日本漢詩のアンソロジー」(國文學研究資料館、コレージュ・ド・フランス日本學高等研究所編『集と斷片 類聚と編纂の日本文化』、勉誠出版、二〇一四年)にやや詳しく述べた。また、先行研究には龜井孝編『語學資料としての中華若木詩抄』(全二冊、清文堂出版、一九七七―一九八〇年)、朝倉尙『抄物の世界と禪林の文學 中華若木詩抄・湯山聯句鈔の基礎的研究』(清文堂出版、一九九六年)等がある。
- (5) 堀川貴司『五山文學研究 資料と論考』(笠間書院、二〇一二年)に翻刻、同續編(笠間書院、二〇一五年)に論考を収めた。
- (6) 近年東京・琳琅閣書店の目録に掲載されている、神田香巖舊藏本。なお本作品の先行研究には蔭木英雄「翰林五鳳集」について―近世初期漢文學管見―(全三回、『相愛大學研究論集』四〇六、一九八八年―一九九〇年)、注(18)に觸れた朝倉和論考等がある。
- (7) この點については、堀川注(5)前掲書(笠間書院、二〇一五年)第一章「五山文學における偈頌と詩」において詳しく述べた。ここではその概略を示す。なお、別集の編纂は必ずしも著者自身の意向が反映されているとは限らないが、自編でなくとも、語録および別集においては門弟等身近な者による編纂が多かったと推測され、當時の編成意識が反映されていると見て大きな支障はないと判断した。もちろん、後述のように、後人による改編はあり得るので、あくまで大まかに全體の傾向を見らるものである。
- (8) 島田修二郎・入矢義高監修『禪林畫贊―中世水墨畫を讀む』(毎日新聞社、一九八七年)所收。堀川貴司「漢詩文を讀むことと書くこと」(島尾新編『東アジアのなかの五山文化』東アジア海域に漕ぎだす4、東京大學出版會、二〇一四年、第II部第二章)でも觸れた。
- (9) 建仁寺兩足院藏本の影印が吉田幸一編『雄長老集』(古典文庫、一九九七年)に、蔭木英雄・濱田啓介による翻刻が岡見正雄編『室町ころ』(角川書店、一九七八年)にある。堀川貴司『詩のかたち・詩のころ』(中世日本漢文學研究)(若草書房、二〇〇六年)において内容の分析を行った。
- (10) 朝倉尙「自筆稿本系統『小補東遊集』の出現―天理圖書館所藏『小補東遊集』をめぐって―」(『國語と國文學』第八三卷第二號、二〇〇六年)
- (11) 朝倉尙「禪林における艶詞文藝をめぐって―研究の現状と現存作品集(群)―」(『中世文學』第五六號、二〇一二年)
- (12) 堀川貴司『松蔭吟藁』について―室町時代一禪僧の詩集―(佐藤道生・高田信敬・中川博夫編『これからの國文學研究のために―池田利夫追悼論集』、笠間書院、二〇一四年)において著者の略歴と傳本の編成について詳しく述べた。
- (13) 中尾健一郎「光源院本『梅花無盡藏』解題」(『國立歴史民俗博物館研究報告』第一九八集、二〇一五年)は國立歴史民俗博物館藏の傳本に関する詳しい考察で、ここから、萬里自筆本においては、頌部・詩部・雜

文部という順序による三部構成を目指していた、と結論づける。また、艶詩を詩集から排除した可能性も指摘する。

(14) 注(5) 前掲著(笠間書院、二〇一一年)に論考を収める。

(15) なお、萬里集九が東海道旅行中に作った詩を「行巻」に収めよう、と詩の中で詠んでいる例もあり(注(8) 前掲書で觸れた)、「旅行」中の「詩巻」の意味でも用いられる(『日本國語大辭典』は『蔭涼軒日録』の用例とともにこの意味のみ挙げる)。

(16) 注(5) 前掲書(笠間書院、二〇一五年)に解題・翻刻を収める。

(17) 同前。

(18) 朝倉和『翰林五鳳集』所收の絶海中津の作品について―清書本としての國會圖書館藏鄂軒文庫本―(『古代中世國文學』第二六號、二〇一六年)は、同書所收の絶海作品が『蕉堅藁』を主たる取材源とすること、『百人一首』『花上集』等先行の總集も使われていることを論證する。

〔付記〕

本稿は第63回九州中國學會大會(二〇一五年五月一七日、於九州大學伊都キャンパス)における講演「五山文學における詩集の編成について」(JSPS 26284050 代表・東英壽との共催)の内容をもとに増補を加えたものである。